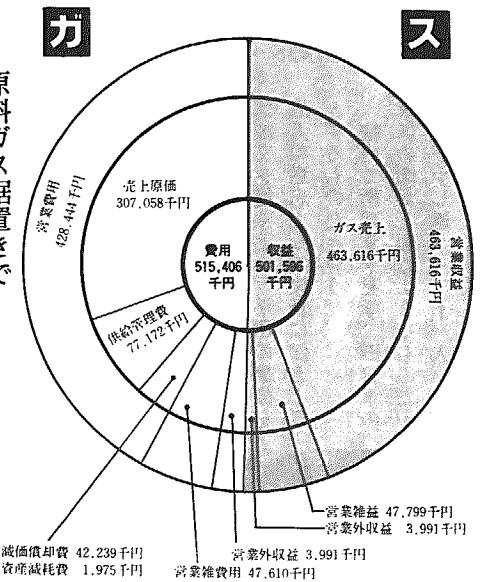


昭和58年度特別会計決算の報告

昭和58年度のガス事業会計、水道事業会計、農業共済事業会計の三特別会計が9月議会で承認されましたので報告します。なお、一般会計と国民健康保険特別会計、老人保健特別会計は12月議会で審議される予定です。



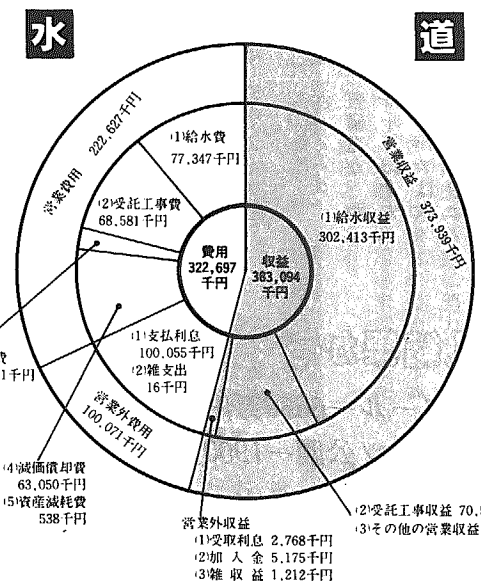
原料ガス据置きで 1400万円の黒字

58年度のガス事業会計は1381万円という近年にない黒字となり、昨年度の赤字891万円の赤字を解消し、490万円の未処分利益剰余金を計上できました。

まず、収益ですが総額5億1541万円です。うち料金収入は4億6362万円、前年比11.4%、4732万円の大幅な増収となつています。この理由は冬が予期しない異状気象で寒かったためガスをたくさん使ったこととです。供給戸数は5484戸でした。

一方、費用ではガス管などの建設改良工事が6816万円で前年度より2649万円も少なく、さらに原料ガスの価格が据置かれたため、総額で5億1597万円となり、前年度より1430万円、2.9%の伸びにとどまりました。

好決算となったガス会計ですが、原料ガスの価格が59年11月30日までということやガスの老朽化の改善などが必要ですので、今後はかなり苦しい財政状況になると考えられます。

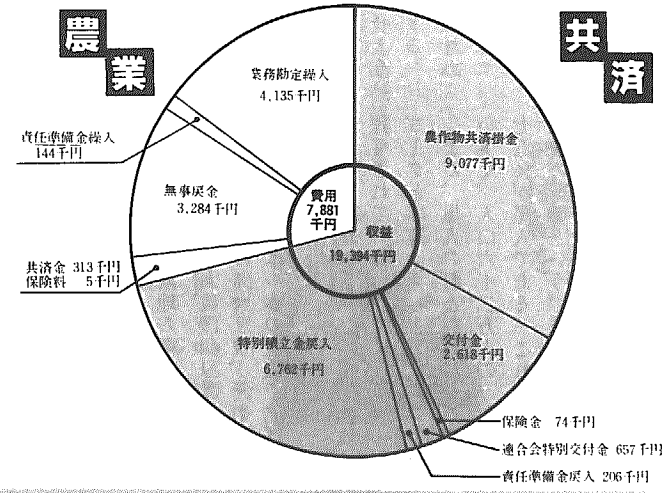


厳冬で需用が増え 6000万円黒字

58年度の水道事業会計は6040万円の黒字となり、前年度の繰越利益剰余金と合わせ6990万円の未処分利益剰余金を計上しました。給水戸数は6141戸で180戸増え配水量は前年度比12.2%、給水量も7.4%の大幅に伸びました。この理由は冬期に異常低温が長期間続き凍結防止用に蛇口から流出された水量が大きかったこととです。

収益は給水量の大幅増により、給水収益が3億241万円で前年度より1721万円、6%の増収となりました。このほか利息なども加え収益の合計は2400万円増の3億8309万円となりました。

費用としては浄水場第二回拡張工事の完了により減価償却費や企業債の支払利息が大幅に増加し、また建設改良工事が梶道田・内野線の本管工事などで前年度の2倍以上の工事費(8500万円)となつています。費用総額は3億2270万円で前年度より14%伸びました。



天候良好で災害なく 1515万円の黒字

農業共済事業は農作物に被害が発生した場合に恵まれ大きな災害もなく、収益が費用を大きく上回り1515万円の黒字となりました。この利益は特別積立金に繰入れられ、今までの積立金と合計額は6860万円で、万一の災害に備えています。

共済では町のほとんどの水稲農家(714戸、1147ヘクタール)を引き受けています。このうち58年度に共済金を支払った農家は4戸で面積は78アール、金額は25万4千円でした。麦については引受戸数8戸、19.5ヘクタール、稲と同様順調で損害評価の結果3戸53アールに被害が見られ5万9千円を支払いました。

黒埼町の 今昔

幻の旧信濃川(2)

天野の瀬替工事で流水量が減少してしまった旧信濃川。

信濃川の流れを変えた天野の瀬替工事

近世初期の信濃川は左図のように舞瀨から平賀、嘉木、曾川、楚川を結んで大きく蛇行して流れていた。

信濃川はここから二つに分かれる。一つは本流の旧信濃川で柳作、立仏、寺地を。もう一つが支流の現信濃川である。この二つの信濃川に挟まれていたのが山田島である。

蛇行する信濃川に囲まれるように天野がある。そのため信濃川の氾濫、決壊の災いを毎年のように受けていた。

江戸時代の初め、この蛇行部分から信濃川を切り離し垂直に下流へつなぐ瀬替工事を計画した人がいる。加茂町の中沢弥助父子である。

慶長十九年(一六四四年)中沢父子は天野の開墾を始めると同時に、私財を投じて工事を始めた。工事は蛇行部の分流点を切り新河道を掘るものだったが、中沢父子は工半ばで病没してしまった。しかし、工事は新発田藩の



治水対策として天野村民に引き継がれ、承応六年(一六五二年)に延長六百間(千八百一尺)、幅八十四間(百五十一尺)の新河道が完成した。

新河道は六年後の明暦三年(一六五七年)流路を変えられず閉じられたがこの後も工事はたびたびくり返され、延宝七年(一六七九年)によりやく新河道に水を導くことができた。

この新河道が現在の信濃川であるが、瀬替工事前も信濃野の名主加藤順蔵は、蛇行部の分流点と合流点に堤防を築いた。

天保八年(一八三七年)天野の名主加藤順蔵は、蛇行部の分流点と合流点に堤防を築いた。跡形もないが、大橋の少し南側にあつたと思われる。

天野の瀬替工事で流水量が減少してしまった旧信濃川。

水時は水が流入するような低湿地帯だつたと思われる。蛇行部は廃川敷地となり天野新田として開墾され始めたが、完全に締切られず、川水が流入してきていた。

このため、増水時には水が新河道と蛇行部を流れ、天野は孤島のようになつてしまつた。

天保八年(一八三七年)天野の名主加藤順蔵は、蛇行部の分流点と合流点に堤防を築いた。

跡形もないが、大橋の少し南側にあつたと思われる。

き水流を閉じ、さらに耕地の冠水を曾川村に新水路を開いて鳥屋野瀧へ排水する計画を立てた。

この工事が完成したのは万延元年(一八六〇年)であるが、鳥屋野瀧への新水路はうまくいかず、明治四年順蔵は新潟県へ願ひ出て明治六年新水路が完成した。

(信濃川百年史参考)

現信濃川の水が増し旧信濃川は減少する

蛇行部は現在農地や宅地となつている。曾野木小学校もある。信濃川大橋を渡り新瀧市曾野木の入口にあるバス停水吉商店の前を通つている市道が、旧信濃川蛇行部の北側堤防である。南側堤防は今も跡形もないが、大橋の少し南側にあつたと思われる。

明治九年に記された「西楚川新田地目別絵図」を見ると、旧信濃川の入口には大きく川中島が出来ていて川口をふさぎそうになつている。

明治二十二年四月、町村制が施行され、合子ヶ作及び西楚川新田は曾川村と合併し、中蒲原郡曾野木村となった。このとき黒埼村はまだなく、板井村、木場村、黒鳥村、金巻村、鳥原村がある。

旧信濃川は流水量は減少し河川敷が広がつてきた。建設省信濃川下流事務所にある明治二十九年の新堤防設計図を見ると、旧信濃川の分流点と合流点に堤防を築いた。

合流点はほとんど埋められかけ、川幅もせばまり深さも浅くなつていく。

明治二十七年県議会で、山田島をめぐる信濃川流域の改修計画が論じられ始める。最近、復刻された新潟新聞には次のように書かれてある。

信濃川築堤工事に關し山田島は東西周囲に堤防を築くものにて河流は現在の如く島の左右に分流せしむる。中略) 今回の設計によれば山田島の中央を縦断して一直線に堤防を設け(中略) 川床は皆干上り地となる設計にて、山田島の東部即ち堤防外流域となるべき部分の移転家は五十余戸なり。

これによれば信濃川に築く新しい堤防は計画段階で、鳥屋野川と大河の両方に築こうとしたが、変更され山田島の堤防は山田島の中心を走るように築かれることになつた。

さらに大河はせき止められ、堤防外の西楚川新田と合子ヶ作約五十戸が新堤防の内側に移住させようといふことである。

こうして、山田島と旧信濃川の運命が大きく変える新堤防が築かれることになつた。



現在の天野